こころの小径(こみち)

つなぎ合う手と手

《7》

世話係 『与えることの大切さ』学ぶ

いつかはホームを「大家族」に

「与えられるより与える方が大事。人は自分の価値が認められないと生きられないんですね。たとえ、ボケていても」――。東京・練馬区で有料老人ホーム「シルバーヴィラ向山」を経営する岩城祐子さん(七七)がお年寄りたちとの十八年間で得た結論だ。

岩城さん自身、「仕事が私の人生」という信念で生きてきた起業家。二十代で私立幼稚園を立て直し、三十代では損害保険の代理店、四十代は自動車教習所、タクシー会社、女子学生会館と次々に時代のニーズを先取りしてきた。そして、五十七歳でホテル形式の都市型老人ホームを設立。現在百二十四人のお年寄りを預かっている。平均年齢は八十四歳。その約六割が痴ほう老人だ。

与えることの大事さを最初に教えてくれたのはAさんだった。自分がナンバーワンでないと承知できないAさんは、周囲とはトラブル続き。自らも絶え間のないしっとに苦しんでいた。「私は書家だ」と言うのを聞いた岩城さんは「それなら、書道の先生をしてごらんになったら」と勧めた。近所の子どもたちに来てもらうためには授業料は無料の上、毎回練習用紙とおやつを用意した。危ぶみながらのスタートだったが、始めてみると堂々たる書道教師ぶりだった。子どもにも親にも好評で、Aさんも見違えるように落ち着いた。教室はAさんが亡くなるまで三年間続いた。

かつて女子大で英語講師を務めたB子さんのためには、英会話教室を開いた。ロンドンで生まれ少女時代を過ごしたB子さんは、痴ほうが出始めると同時に日常の言葉が半ばまで英語になった。〝先祖返り〟現象だ。さすがに一人での授業は無理で、専門の先生を助手に頼んだ。助手が英語で話しかけるたびにB子さんは上機嫌で応答した。見事な本場英語だった。この教室も五年間続いて、B子さんは八十六歳で亡くなった。

社会学の元教授で九十四歳のCさんは昨年十月、「江戸学」の講座を開いた。受講者は練馬区報を見て集まった主婦、民俗学ファンら十数人。図書館にも資料集めに連つなど大変な張り切りようだったが、三回続いたところで疲れが出て休講中。「身の回りのこともほとんどできない方なのですが、講義に入った途端、プライドがよみがえるのが見えて、感動してしまいます」と岩城さん。

元小学校教師の伊東英子さんの場合は犬の世話だ。シーズー犬のケンタの世話を頼んだら、元気をなくしていた伊東さんにいっぺんに生気が戻った。いまでも五キロもあるケンタを平気で抱き上げる。周囲からは「ケンタ君のお母さん」と呼ばれている。

岩城さんがぜひ実現したいと考えているのはホームを「大家族」にする夢。幼い子どもを抱えた母子家庭、父子家庭の親子に入居してもらい子どもの世話を引き受ける。保育園の時間外の面倒は大部分専門の職員がみるとしても、お年寄りたちにもやってもらいたいことがいっぱいある。何もできない人は声を掛けてくれるだけでいい。百人以上のおばあさん、おじいさんのいる大家族だ。「子どもは必ずやさしい子に育つ。お年寄りたちは生き生きしてくる。いいことばかりなんです」

もう一つは、家庭内暴力や不登校の子どもたち。これは以前に経験がある。高一の女の子をホームに預かった。暴力事件と途みで保護観察処分という荒れ放題の子だったが、何の横えも必要ないお年寄りたちとの付き合いで気持ちがガラッと変わった。掃除、お使いのほか、お年寄りに食事を食べさせたり後片付けする世話係も進んで引き受けた。年寄りたちにかわいがられ、人気者になった。何カ月かたって彼女の顔付きを見たかっての担任は「信じられない！」と叫んだ。

岩城さんは毎日午前二時まではホームの事務室にいる。睡眠時間は三、四時間。真夜中に起き出した小さい子が母親を捜すように、何人かのお年寄りは事務室に来て岩城さんの顔を見ただけで安心して部屋へ戻っていく。

岩城さんは七十七歳まではこの仕事を続けるつもりだ。「それ以上は体力がもたないと思います。でも、それから先だって、私にできることがある限り、させていただきます。本当に、お世話させていただくことがお世話していただくことなんですよね」

（赤沢信次郎）

（おわり）

伊東さん(右)とケンタの散歩に付き合う岩城さん＝東京・練馬区向山で